

C.I.A.M



□CIAM(近代建築国際会議)
1928~1959

都市、建築の将来について討論を重ねた国際会議で、モダニズム建築の展開の上で大きな役割を担った。これ以前、近代建築の萌芽に、潜在意識の時代と位置づけられる時代があった。ここにはハワードの田園都市論や、トニーガルニエの工業都市案などがあげられる。その後、これらの流れは、第一次大戦後におとずれた現実の機械時代（第二次の産業革命と言われる時代）に裏付けられ、人々と現代社会に定着していくようになる。このように理論が実装されていく中、1927年の国際連盟本部設計コンペにおいて、コルビュジエの計画案が、ボザール流の旧式な建築家に排斥され、近代建築運動側と保守派の対立が表面化し、これをきっかけに翌年からCIAMが開催された。ゲロビウス、ミース、コルビュジエら、24人の建築家が参加した。

□第二回会議 最小限住宅
1929

ロークストハウ징を手がけていたエマント・マイを中心とした最小限住宅の研究がなされる。

□第四回会議 機能的な都市
1933

コルビュジエを中心にアテネ憲章がつくられる。

□第九回会議 住宅憲章
1953

この時期、TeamXが結成される。

□第十回会議
1956

第十回会議では、以下の内容が議論された。

1. クラスター（全体より部分を）
2. モビリティ（固定より変化を）
3. 成長と変化（開いた美学へ）
4. 都市と建築（組織より個人を）

これらの議論の中心となったのは、スミソン夫妻や若手建築家で、往年の建築家と対立した。

□第十一回会議 CIAM解体・整理
1959

第十回での動的な建築・都市計画における若手との対立、また、第四回に制定されたアテネ憲章の機能主義的な建築や都市計画の批判などが指摘され、内部分裂によって第十一回会議で正式に解体された。この後、若い世代によって、「動く」「時間」などの概念が建築に用いられるようになっていった一方、サーリネン、カーン、フィリップジョンソン、ニーマイヤー、丹下らは、CIAMの展開過程で定式化されていったイデオロギーに基づいて、独自の作品を発表していった。それらの作品は先駆者たちの作品と絶縁したわけではなく、アイディアを共有し、より洗練された作品を生むことに努力が集中している。

C.I.A.M崩壊からポストモダニズムへ

□TeamX(英)
1953~



□Hoptstadt Berlin
1958
A.P.Smithon(英)

ベストリアンデッキで人の動きを可視化する。

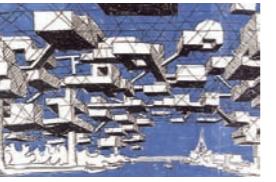
□Children's Home
1960
Aldo Van Eyck

都市の構成単位を積み上げていくことで予期される全体像に近づける。

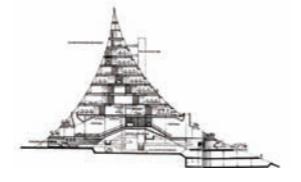
□Toulouse-Le Mirail
1961
Candilis,Josic,Woods

個々の建築の集まりの中に基本的な骨組みを挿入する。

□GEAM
1957~



大衆の意志によって造られ、変化する建築を新しい技術にもとめた。モダニズムを批判、可動性のある社会における建築の原理を提示した、ヨナフリードマンによって牽引された。通称「動く建築グループ」。TeamXの理論的な立場とは一線を置き、より実践的な建築を目指した。



□空中都市
1964
Yona Friedman(洪)



□ARCHIGRAM(英)
1961~

雑誌アーキグラムを通じ、建築を情報化し、テクノロジーへの期待と不安を表現した。マスメディアを通じてフレームを提示し続けたことが評価されている。この意味で、TeamXやメタボリズムとは絶縁しているが、思想的には類似している所が多い。

□Plug-in City
1964
Peter Cook(英)

単位空間をカプセル化、ストラクチャーにプラグインする。



□Cities Moving
1964
Ron Herron(英)



□メタボリズム(日)
1960~

メタボリズム運動は日本で生まれたと考えられているが、CIAM崩壊以降の流れ、TeamX、Archigramの影響を多く受けていると考えられる。Plug-in Cityの単位空間をメガストラクチャーに埋め込む考え方方は、黒川紀章の中銀カプセルタワーに見られる。

□中銀カプセルタワー
1972
黒川紀章

メタボリズムの考え方を現した代表的な作品。

□Alison and Peter Smithon(英)
1928~1993,1923~2003

CIAM解体を導いた中心人物。ブルータリズムを引っ掲げTeamXを主導。また、時間や、動きをいかに建築に介在させるかを研究した。

□ニューブルータリズム

冷酷で厳しい手法の表現様式。世界的な打ち放しコンクリートのブームに美学的な根拠をあたえ、TeamXの建築家たちの作品にたいして理論的なバックアップとなるが、60年代には、鉄は鉄らしく、コンクリートはそのまま露出するといった物質性のみに頼る方法は次第に動きが取れなくなっていた。

□実存主義

ニーチェを先駆者として、30年代にハイデガー、そして、W.W.II後、サルトルへ繋がり世界に広まっていた現実存在に重きを置く思想。スミソン夫妻の手法は、構造主義的だが、その発想はCIAMの反省を踏まえてか実存的といえる。

□構造主義

60年代に登場した方法論で、ソシュールの言語学や、クロード・レヴィ=ストロースが文化人類学における婚姻体系の「構造」を数学の群論で説明したのが嚆矢。研究対象を構成要素(情報)に分解して、その要素間の関係を整理統合(システム化)することでその対象を理解する方法。建築における構造主義の影響に、「動き」に許容しうるダイナミックなものへの志向や、「部分から全体へ」という微观的な視点、文化的なコンテキストから建築の意味を再編成するものなどが挙げられる。

□記号論

記号とその記号同士の体系や、その解釈、それらの生成を行う主体に関する学問。

□Peter Cook(英)
1936~

アーキグラムの主宰者。来日公演の磯崎との対談で、スミソン夫妻を師と仰いでいたことを語っている。

□カウンターカルチャー

反文化。既存の文化や体制を否定し、それに敵対する文化。1960年代のアメリカで盛り上がりをみせた。

□黒川紀章(日)
1934~2007

メタボリズムの運動を、大高正人、横文彦、菊竹清訓らとともに主導した。

□磯崎新(日)
1931~

CIAM以降の建築の流れを膨大な資料とともに整理し、ポストモダン建築を牽引したとされる。

□ジョイントコアシステム
1962

不确定な他者の介入によって発生する都市の生成を表現する。

□Christopher Alexander(奥)
1936~

CIAM解体後

□The Use of Diagrams
in Route Location1962
(With Marvin Mannheim)

CIAM解体後

□A City is Not a Tree
1965

CIAM解体後

英国で数学を学び、ハーヴィードで建築を学ぶ。都市計画家として、「形の合成に関するノート」、「バタンランゲージ」などを発表し、CIAM等、モダニズムの都市計画に批判を投じた。「都市はツリーではない」のなかで、モダニズムの都市計画をツリー（右図）、実際の都市を、セミラチス構造（右図下）と分析し、モダニズムの都市計画のはらしていた問題を数学的集合論で解明かそうとした。当時は、強い衝撃をもって迎えられた論考だったが、柄谷行人は、「隠喩としての建築」のなかで、セミラチス構造はツリーの重ね合わせにしか過ぎないと批判している。人間が思考の中で構造を解き明かすことのできる部分と、それらの作用によって作られた環境は、相互に不可分であることを受けて、理論を展開し「バタンランゲージ」による民主的な設計方法を模索していく。これによって計画されたものに、盈進学園東野高等学校がある。

□Hans hollein(奥)
1934~

CIAM解体後

□University
1966

CIAM解体後

雑誌「バウ」の編集長。「すべては建築である」と宣言。60年代後半の既成の価値観への異議申し立て、コルビュジエとミースの死に象徴される近代の終焉、同時代のアートの動向、およびメディアの発達やポストモダン文化の萌芽といった時勢の変化を受けて、旧来の建築の閉鎖性を打破し、建築概念の拡張を主張した。従来の建築伝統の妥当性は失われたと述べ、建物そのものではなく、主体を取り囲み影響を与える環境こそが建築であると言ふ。そのように捉えると、右図のテレビを「大学」と定義しても問題ない。抽象化された上位概念にまで建築を押し上げた。また実作では、近代建築が否定した、象徴性をともなった意味を復活させようとしたと言われている。

□ポストモダニズムとポストモダニズム建築

ポストモダニズム建築は、「合理的で機能主義となった近代モダニズム建築に対し、その反動として現れた装飾性、折衷性、過剰性などの回復を目指した建築」とウヰキペディアにはある。一般的に、ポストモダニズム建築はこのように捉えられているし、実際80年代に日本では、「バブル経済」の好景気に支えられてそのような意匠の建築が多く生み出された。それには、ロバート・ヴェンチューリの論考「建築の多様性と対立性」「ラスベガス」の影響が見られる一方、その手法が形骸化した形で結晶化したために、建築家の好みの意匠を押しつけたものと捉えられるポストモダニズム建築に批評があげられている。しかし、ポストモダニズムを、モダニズム（機能主義的な考え方の建築や都市論、二つの大きな都市デザイン<CIAMや、HTPC(国際住宅都市会議)など>）への批判的時代と定義し、CIAM崩壊以降の60年代から80年代までの、TeamXや、アレグザンダー、構造主義、記号論など、ポストモダニズム建築が生み出されるまでの動きを観察すると違った見え方がしてくる。俗悪な表現として捉えられているポストモダニズム建築と、思想としてのポストモダニズム、その両方を再考する必要があると考えられる（＊編者の妄想）。